最優秀

母が支えてくれた全国大会

新見市立哲西中学校
二年　後藤　大輝

「大輝打て！後悔するな。」

僕が最後のバッターボックスに立った時、母の大きな声が聞こえてきた。中学二年生のこの八月上旬に、ソフトボールの全国大会が大阪で開催された。僕は小学校三年生の時に、スポーツ少年団に入り、そこで初めてソフトボールに出会った。父も経験者ではなく何もかもが初めてだらけだった。ソフトボールを握ったこともないし、グラブも触ったことがない。どんな服装でプレーするのかも分からなかったので、入団式でも僕一人だけジャージ姿だった。父と母が、他の保護者に色々と聞いて次の日には、僕を連れてお店に行き一式そろえてくれたことを、昨日のことのように思い出せる。周りのお父さんは、ほとんどソフトや野球の経験者ばかりだった。僕のグラブは、母方の祖母が、「男の子だからグローブとかいるじゃろう。」と買ってくれた物だった。そのうち、ソフトボールをすることになったけれど、僕は赤いこのグラブを大切にしたいと思って使うことにした。父のグラブも祖父が昔使っていた物だったので、見た目も年季が入った物だった。これらのグラブを何度かバカにされたこともあった。しかし父と母との約束で、

「大輝が一年間ソフトを続けることが出来たら新しいグラブとバットを買おうと思う。だから頑張れ!!」

と言われていたので、僕は一生懸命に頑張った。父も図書館で本を借りてきてくれたり、経験者に聞いて、練習に付き合ってくれたりして指導してくれた。そして、四年生からはキャッチャーとして正面からボールを受け止める役割を監督から与えられ、父もコーチとして背番号「32」を背中につけてベンチ入りをして同じフィールド・グラウンドに立つようになった。コーチである父は、僕と同じユニフォーム姿だった。

キャッチャーとしても、真正面から怖がらずにボールを体を張って止めること、そのことに集中して頑張った。体中にボールが当たり、痛い思いも沢山して、正直怖いと思うこともあった。どんな球でも、どれだけ努力して捕っても、キャッチャーだから捕って当たり前だと思われた。キャッチャーのマスクの下、悔しい思いも沢山してきた。投げたら皆から、

「ナイスピッチャー。」

と大きな声を掛けてもらえるピッチャーは、いつも陽の当たる場所にいるように見えて正直うらやましいと思ったこともあった。しかし、僕の母だけは、いつも誰よりも大きな声で、

「ナイスキャッチャー。よく捕った。」
と試合中に言ってくれた。僕は、同級生より背が高かったけれど、もっと丈夫な体になるようにと、一生懸命にご飯を作ってくれた。
「パンはおやつじゃ。」
と言うのが母の口ぐせで、朝ご飯にパンが出てきたことはない。朝から、唐あげやチャーハン、そして肉や魚で団子を作って、味そ汁に入れてくれた。大事な日の朝ご飯には、決まってオムライスを作ってくれて、ケチャップでメッセージを書いて出してくれた。毎朝四時には起きて僕達家族が、元気良く出発出来るようにしてくれている。朝はまず野菜たっぷりのサラダを食べ、そして主食を食べてフルーツで仕上げ。このメニューを食べると、学校でも、試合でもいつも頑張れた。食欲がないなと思っていたら、何も言わなくても具が沢山入った熱い雑炊を、そっと出してくれた。
「母ちゃんは、ご飯でしか大輝を支えてあげれんから。」
といつも口にしていた。確かに母はソフトボールや、僕が中学校から入部している野球のルールも知らない。妹の方が何倍も詳しいから、時々妹に聞いている位だ。けれど、僕は忘れない。小学校の夏休みや、夕方にカゴいっぱいのボールを車に積み、母がグラウンドに連れていって投げては、僕にノックをしてくれた。毎回試合の度にビデオを撮り、帰ってから僕は自分のキャッチャーとしてのプレーや、打者としての自分を振り返り父からアドバイスをもらっている。その撮影をしてくれている母の叫び声や、時には泣いているであろう声も入っている。野球でもソフトボールでもキャッチャーとして踏ん張れているのも、母の存在があるからだ。僕が全国大会の緊張の中最終打席で打てたのは、母の声のお陰だと思う。
「母ちゃん、支えてくれてありがとう。」